



URA リサーチ・アドミニストレーターの10年 —来し方行く末を思う



Makiko TAKAHASHI **高橋真木子** 金沢工業大学大学院 教授, リサーチ・アドミニストレーション (RA) 協議会副会長,
INORMS 会長

はじめに

2013年に本論説欄に寄稿の機会をいただいてから、丁度10年経った。当時、URA（日本語のリサーチ・アドミニストレーターの略称。米国のUniversity Research Administratorが由来だが、長過ぎるのでカタカタ表記ではUをとり、略称は3英文字としている）という研究推進支援の専門職に対する認知度は限りなくゼロに近かった。RA（リサーチアシスタント）と間違えられたり、URA自身も自嘲的に、「仕事はウラ（裏）」と言っていたこともある。

2023年現在、各種の政策文書や審議会でもこの職名を聞くようになり、なんと経団連の提言¹⁾にもこの職名が載っている。隔世の感である。

では、現状で満足かという、生憎「残念ながら」である。今回は、この10年間私自身のかかりの時間も投じた、日本におけるURA定着・展開の歴史をざっと振り返り、完全なる私見でその到達度を評価してみる。そして、今思うところを最後に呟いてみたい。

この10年間のURA関連政策の振り返り

アカデミアの研究推進支援機能を担うURAは、専ら文部科学省の政策として2011年から本格実施された。その仕事は多岐にわたり、研究企画、資金獲得、プロジェクトマネジメント、知財活用、IRなど、およそ研究周りのすべての活動をカバーする。政策のグランドデザインは、2011（H23）年概算要求1枚ものものに集約され、構想は大きく3本の柱からなる。1) 実務者人口の増加のための時限人件費補助事業、2) URA機能向上のための研修プログラム・スキル指標の策定、3) URA認知度向上と人材定着のための全国的なネットワークインフラの整備、である。

この3本柱は、それまでの数多のイノベーション系人材施策の問題をレッスンに、よくツボを押さえていたと思う。例えば、産学連携コーディネータ、特許アドバイザー、NEDOフェロー等、皆様の周りにも、科学や技術が好きで、その仕事に意気を感じていた人が

居たのではないだろうか。個人レベルで活躍した人の顔が浮かぶ一方、大学の2大職種、研究系と事務系職員の隙間で、新しい職種として認知度を得るのは非常に難しい。2010年当時から歴代の文科省担当課長・室長等とともに、これらの施策すべてに関与する、という得難い経験を通じ、改めて個人レベルの努力や活躍（ボトムアップ）を前提に、それとは違う次元の政策（トップダウン）によるアプローチが必須である、と痛感する。

URA関連政策の到達度評価

100%個人的な見解で、3本柱で目指した政策目標について、2023年現在の状況をSABCで評価すれば、こんなところだろうか。

<URAの認知度向上>

評価：B

理由：研究推進支援の専門人材の必要性は、各種の政策文書の常連とも言え、職名の露出度はある程度高まった。一方、2013年の本欄での山内氏の指摘²⁾にもあるとおり、URAのステークホルダーである大学執行部・研究系職員・事務系職員に対し、その必要性が認知され組織に受け入れられたか、ということ実行はまだまだ途上。

<URAを必要とするロジック（仕事の魅力度）>

評価：C

理由：流石に、「博士号取得者の職場が少なすぎる。博士の知見を生かせる研究関連職で就職のパイを増やす」というネガティブな文脈は、表立っては見なくなった。一方、いまだに、「研究力が落ちたのは、専ら研究者の研究時間が足りないから。雑務を代替する人材を投入することで…」という流れで登場することが多い。この仕事を楽しんでやっている個人としては残念至極。そもそも、雑務は撲滅すべき。そして、こんなことではますます、魅力ある大学作りに取り組む世界との差が開く…と危機感は募る一方である。実務者人口の8割が任期制雇用であることも見逃せない。

<日本におけるURA定着のための諸活動>

評価：A

理由：1) 人口が増えた（214人から1,627人へ。ただし大学事務系職員約23万人に対して人口比0.7%³⁾）。2) 全国の実務者が集うコミュニティができた（一般社団法人リサーチ・アドミニストレーション協議会（RA協議会）が2015年に発足）。3) スキルを示す共通指標の認定制度が本格稼働。4) URAの各国団体22組織が加盟する国際機構INORMSの世界大会を日本がホスト（2021年広島大会）、現議長国（いずれもアジア初）。

こうしてみると、千里の道も一歩から、である。総括すれば、国際的にみても、トップダウンのグランドデザインとボトムアップのミックスによるこの10年間の蓄積は、胸を張れるものである、だろう。

URAの仕事の醍醐味：長倉三郎先生とのエピソード

そんな10年間の蓄積があってもいまだ、「URAってよくわからない」という研究者などの声を聞く。その理由は「URAの3大多様性」によると思っている。業務⁴⁾、前職経験、所属組織の構造、の3つである。統計データ等のお堅い説明は多々ある⁵⁾ので、ここでは、日本化学会ゆかりの先生とご一緒した経験、実は私自身の楽しかった仕事ベスト3の1つをご紹介します。

<長倉三郎先生とのエピソード>

第一線の分子科学者を卒業し、科学技術関連財団の理事長を担っていた長倉先生は、科学が社会に果たす役割の再定義に着手した。ご自身の研究人生を通じ長年考えてこられたことではあるが、学問領域としては全く違う。自ら何冊もの本に線を引いて勉強され、各分野の有志と研究会を発足させ、3年間の蓄積を報告書にまとめられた。この間、財団職員として理事長のお手伝い担当となったのが私であった（今風に言えば理事長直属補佐、と言えるかもしれないが、長倉先生の研究に対する厳しさは公知だったので、“研究系のお手伝いはキツイ”，と先輩達はやりたがらず、一番下っ端の私に回ってきただけのこと。今では笑い話である）。当初は、全く意味不明な議論であったが、議題の検討、関連資料の準備を通じ、門前の小僧ながらも興味が湧き、後半は講演候補者や議題の組み合わせにも意見を聞かれるようになった。その果実「科学と社会」はその数年後に政策提言・ファンディングにつながった。

研究のダイナミクスでいえば、研究企画の萌芽期を、誰よりも直近で、その間の揺らぎも含め、リアルタイムで見せていただいた。かつ、ほんの少しそのプロセスに貢献もできた。今振り返ると、あれはまさにURA

の仕事であり、得難い経験であった。担当を離れるとき、「一緒に勉強できて良かった」という先生の一言は、この仕事の名利に尽きると思っている。科学に携わる仕事をする人すべてに響くとは思わないけれど、それでも、この仕事の醍醐味を感じていただけるだろうか。

最後に、小さな呟き

「URAの課題など、言いたいことを率直に書いてよい」と寄稿のお声がけをいただいた際の躊躇を、実は今もひきずっている。理由は簡単。大局的な、望ましいあるべき姿・方向性は共有され、「あとは実行あるのみ」のフェーズなのに、その実行速度が遅い、遅すぎる、と思うのである。

優れた研究者と伴奏するURA、大学執行部の下で戦略を練り研究プログラムを設計していくURA等、活動領域はいくつかある。国際的にも研究力強化を実装する専門人材として活躍の場を広げていくことが今後ますます求められている⁶⁾。先の達成度評価「C」の「仕事の魅力度」をA評価に上げ、また実行速度を上げるためには、URAと研究者コミュニティの双方がコミュニケーションの機会を増やしていくこと以外にはないであろう。

今回の寄稿をきっかけに、国内の著名大規模学会の学会HP内で、URA、リサーチ・アドミニストレーターをキーワード検索してみた。2013年の段階で、すでに記事タイトルにまで登場し、数名の寄稿者がいる学会誌は、本「化学と工業」誌だけである。その先見の明に改めて敬意を、そして歴代会長や論説委員会の皆様をはじめとしたURA定着に対する応援に心から感謝を申し上げたい。我々URAコミュニティはこれからもできるところから取り組んでいく。ぜひ、ご一緒いただきたい。また10年後に、お声をかけていただければ光栄です。

- 1) 一般社団法人 日本経済団体連合会 2022年10月11日「[次期教育振興基本計画]策定に向けた提言」Vol.66-0, Sep 2013. http://www.keidanren.or.jp/policy/2022/088_honbun.html
- 2) 山内 薫, 化学と工業 **2013**, 66, 699.
- 3) CSTI 木曜会合説明資料 (高橋真木子) 2022年5月19日.
- 4) 研究戦略の策定支援やIR, 外部資金の獲得支援, 採択課題のマネジメント, 広報, アウトリーチ, 国際連携, 産学連携など, 研究ダイナミクスの全域にわたる. 最近ではこれに, リサーチインテグリティ, 経済安全保障への関与も.
- 5) 例えば, 文部科学省大学等における産学連携等実施状況調査 (2023).
- 6) Research managers are becoming advocates for responsible research, *Nature* **2021**, 595, 150.

© 2023 The Chemical Society of Japan

ここに載せた論説は、日本化学会の論説委員会が依頼した執筆者によるもので、文責は基本的には執筆者にあります。日本化学会では、この内容が当会にとって重要な意見として掲載するものです。ご意見、ご感想を下記へお寄せ下さい。
論説委員会 E-mail: ronsetsu@chemistry.or.jp